

小児救急について



理事 クリニック 高橋 貢
西条市医師会 小児科
高橋 貢

し、発熱11刻も早い救急受診につながっていると思われる。

そこで、急な発熱の場合の病院受診のタイミングについて、実際の細菌性髄膜炎の子どもの中から一緒に考えてみましょう。少し難しいかも知れませんが、ぜひ最後までお読みください。

●細菌性髄膜炎について

細菌性髄膜炎とは、脳や脊髄を覆う髄膜に細菌が感染する病気で、抗菌剤の発達した現在でも死亡率は10%、難聴、精神障害などの後遺症は20~30%にみられる非常に怖い病気です。その頻度は決して高くありませんが、国内で1年間に1000例くらい発症しています。

当院で最近の5年間に経験した4例の細菌性髄膜炎の患者さんについてのまとめです。年齢は7カ月から10カ月の乳児で、発熱または嘔吐で受診されています。症状出現後1時間から半日で病院を受診してはいますが、診断までには約2日かかっています。原因となった菌はインフルエンザ菌（インフルエンザウイルスとは違います。最近ワクチンが始まった話題のHibです）が3例、肺炎球菌が1例で、幸い全員が後遺症なく治癒しています。

診してはいますが、診断までには約2日かかっています。原因となった菌はインフルエンザ菌（インフルエンザウイルスとは違います。最近ワクチンが始まった話題のHibです）が3例、肺炎球菌が1例で、幸い全員が後遺症なく治癒しています。

●具体事例

1人のお子さんについて経過を具体的に説明します。10カ月の女の子です。土曜日の昼から4回嘔吐があり、当院を受診されました。体温は39度3分。咳、鼻水はありません。大泉門（赤ちゃんの頭の骨のない柔らかい部分）の膨隆（局所的な盛り上がり）はありませんでした。

ウィルス性の嘔吐と考え、点滴をして、翌日の日曜日の受診も促し帰宅してもらいました。日曜日には嘔吐はみられなかったため、当院は受診しませんでした。夕方、非常に不機嫌なため、夕方に某病院を時間外に受診しました。

『風邪』と診断されて帰宅し、一晩寝ずに看病し、月曜日に再診されました。体温38度2分でしたが、顔

色不良、不機嫌で全身状態も不良でした。直ちに入院していただきました。インフルエンザ菌による髄膜炎でした。

●時間外受診の前に観察を

このように、非常に恐ろしい細菌性髄膜炎も、発熱当初では診断をつけることは難しく、言い換えれば、髄膜炎成立までに時間がかかるために、発熱してすぐに受診していただいても、診断することは不可能と思われる。

時間外、特に夜間の急な発熱は両親、祖父母にとつて大変な心配事だと思いますが、機嫌はどうか？、水分はとれているか？、顔色はどうか？等々、日頃の元気な時、また、以前の発熱時と比べて今回はどのくらい悪そうか？など、じっくり観察していただき、単に熱の高さのみでなく、全身の状態を注意深く観察することが、最も重要なことだと考えられます。

●かかりつけ医での受診を

時間外に受診したとしても調子が悪ければ、必ず翌日にかかりつけ医を受診していただくことをお勧めします。

かかりつけ医は、その子の普段の様子を知っています。前回の風邪での発熱の時のごとも知っています。

保護者の丁寧な観察と、かかりつけ医が協力してこそ、難しい髄膜炎の早期診断が可能になると思います。小さなお子様の場合は、ぜひ小児科のかかりつけ医を持つことをお勧めいたします。

しかし、医者も人の子、人の親でもあります。ただの間です。休むことも、息抜きすることも必要です。

時間外受診の際には、ほんの少し相手のことも考えていただければ、お互いさらに良い信頼関係が生まれてくるものと信じています。

